

## 「吹田市佐井寺 風土記こぼれ話」の紹介

十五回生 伊藤 發子

千里山会誌に連載され第10号で最終回となりました「千里山人」(和田昌允様)による「千里山開発物語」は、実に明快で実証的、膨大な資料をわかりやすく分析され、このような名文を簡単に読ませていただくことに、深く感謝いたします。執筆者の和田様はもとより編集された方々、ありがとうございます。

その中の(後編六)には「山田村の吹田市合併」の見出しで、千里丘陵の歴史(山田村の円照寺、伊射奈岐神社、山田荘等)に触れておられます。千里丘陵の全体が弥生時代から開けた地であることが判ります。

そこで五、六年前に私が吹田市立図書館所蔵の藤井久義著「吹田市佐井寺 風土記こぼれ話(一)」を図書館からコピーしていただいたのを読み返してみますと、千里丘陵の中世以降昭和初年ころまでの史跡、言い伝えが記されております。私一人で読むのは勿体ないと思いますので、本文の主要部分をそのまま本誌に転載させていただくことにいたしました。

序文、推薦文などは割愛いたしました。なお、題名が「吹田市佐井寺 風土記こぼれ話(一)」となってお

り、続編の刊行も視野に入れられていたと推定されませんが続編(二)が刊行された記録はありません。

先ず、千里丘陵の中心的存在であったのは佐井寺であったことが判ります。それについては本誌第十号(二〇〇七年)で、私が「サイとワニ」と題して佐井寺について少し触れておりますので、おこがましいながら、少し補足して引用いたします。

佐井寺についての文献には、次のようなものが挙げられる。佐井寺に関する最古の文献は「寧楽遺文」(なら いぶん)所載の記録である。

「遺文」とは広辞苑によると  
「過去の時代の文献・文章で現存しているもの」とあるが、まとまった書物になっている以外の、重要な文書を指す。奈良時代(710-784)元明・元正・聖武・孝謙・淳仁・称徳・光仁)は官界・知識人の間に文字が普及し始めた時代で、日本書紀・古事記・風土記を主とする歴史編纂(各家・族の記録を含む)が盛んに行われるようになる。

従って膨大な量の古文書があったはずであるが、現存するのは「石上村」「都家郷」「佐井寺」の三つのみである。特に「都家郷」の太安万侶(古事記の記録者)の墓誌発見は大スクープであった。これは三十年以上前と思

われるが、みかん島から出土したもので、昭和の大発見の一つに数えられる。

しかし佐井寺の記録はそれ以前から珍重されていた古文書であり、奈良時代には佐井寺がいかに著名であったかが判る。この遺文として扱われる古文書は、平安・鎌倉期になると、膨大な量になる。

(一) 寧楽遺文(なら いぶん)の一つ。  
僧道葉銀板墓誌(大和天理市岩屋町五二四ノ三 出土)

表II 「佐井寺僧道葉 族姓大櫛君 素止奈之孫」

裏II 「和銅七年歲次甲寅二月廿六日命過」

(筆者註 これについては千里山佐井寺図書館蔵『吹田市佐井寺 風土記こぼれ話』(藤井久義著 1964)に詳しい説明があるので、この稿の末尾に掲載する。)

即ち和銅七年(714)には、「佐井寺」の名称があり、僧(道葉)の名からして医薬に効験ある寺として評価されていたのかも知れない。

また「群書類従」巻第十八「神祇」の部に「狭井神社」の項目があり、以下のように記されている。

狭井神社。在大和國城上郡。

伝聞。狭井神者。大己貴命之荒魂大國魂神。即当社別社也。

日本書紀曰。倭大神著二穗積臣一。云云。命二大倭直 祖長尾市宿弥一令祭矣。所謂大市長岡岬。今狭

井社 是也。(中略)

狭井神。大己貴命荒魂大國魂命。(中略)

伝聞。狭井神之子。事代主神。(以下略)

よく判らないけれど、「狭井神」、「狭井神社」は大國主命とその御子事代主(ことしろぬし)神とに關係があり、「荒ぶる魂」であり、「大和國城上郡狭井坐大神荒魂社五社」とある。即ち「狭井」と関連のある神社は五社ある。

そんな難しいことは考えないことにして、問題は千里山の佐井寺と「狭井神社」と何か關係があるのだろうか。次に大阪へ行った時には、学殖豊かな現在の佐井寺のご住職様にご教示願いたいと念願している。

(二) 角川「日本地名大辞典」(昭58・10)

「佐井寺」の項目には大略以下のようにある。

吹田市佐井寺にある寺。単立(真言宗)。山号は碓井山(さきいざん)。山田寺の通称で知られる。本尊は山田大臣(筆者註 実名はよく判りません。しかし佐井寺の地に「山田」の地名が残っています)を大檀那として天平七年(736)行基により創建され、坊社60を数えた。寺名の由来は濁水時に霊水を得て「佐井の清水」と言われたことに拠る。弘仁二年(812)には52代嵯峨天皇が当寺に綿100疋寄進され、朝廷が命じ

る恒例の読経を行なう21ヶ寺の一つであった。即ち、延暦寺、清水寺と肩を並べる寺であったが、戦国期の天正年間(信長の死は天正10)に兵火にかかって伽藍を焼失。近世正保四年(1648)京都所司代板倉周防守重宗の助力によって堂宇復興。その時鑄造された梵鐘は、同寺に現存する。

\*筆者註 屯II古代日本における真綿の質量・取引単位(主計式に基づけば一屯II40匁(150グラム)となるが、120匁(450グラム)説もある)。

へーッ びっくりした! 佐井寺さんはそんなにすごいお寺だったんだ。それならば佐井寺の地も重要な場所だったに違いない。でも大和の狭井神社とどのような關係にあるのか、ご存じの方はご教示下さい。

次いで「佐井」について古事記、日本書紀をひもといてみると、

神武天皇の「皇后選定」の段に、神武天皇がイケスヨリヒメ(美和の大物主神ミワノオオモノヌソノカミの娘)を見染めて一夜を過ごした。このヒメの家は「狭井河の上(へ)に在りき」という。そしてその「狭井河」の註

に 其の河を佐韋(さい)河と謂(い)う由は、其の河の

辺に山由理(やまゆり)草多(さわ)に在りき。故、其の山由理草の名を取りて、佐韋河と号(なづ)けきとある。

即ち「サイ」とは百合の花のことである。イスケヨリヒメはきつと百合の花のように美しかったのでしよう。

現在、奈良の大三輪神社の奥に佐井神社があり、大きな石塔に「佐井神社」と彫られている。その前の道を左に行けば、古代史にしばしば登場する「山の辺(へ)の道」である。そういえば同級生に山辺さよ子さんがいらつしやった。大和の佐井神社と千里山の佐井寺と何か関連があるのだろうか。

即ち、佐井寺は真言宗の寺として、平安時代以前の天平七年(736)に、山田大臣という人が出資して僧行基によって創建された。寺名の由来は濁水時に霊水を得て「佐井の清水」と言われたことによる。おそらくその湧水のほとりに百合の花(佐韋・佐井)が咲いていたと推察される。千里山は江戸時代は桃の名所であったと言われている。私たちの故郷が百合や桃に彩られていたとは嬉しい限りである。

さて、今回は本文に入るための紙数が尽きましたので、奥付の著者略歴及び目次のみを紹介致します。

吹田市佐井寺 風土記こぼれ話(一)

発行日 昭和四十一年三月一日

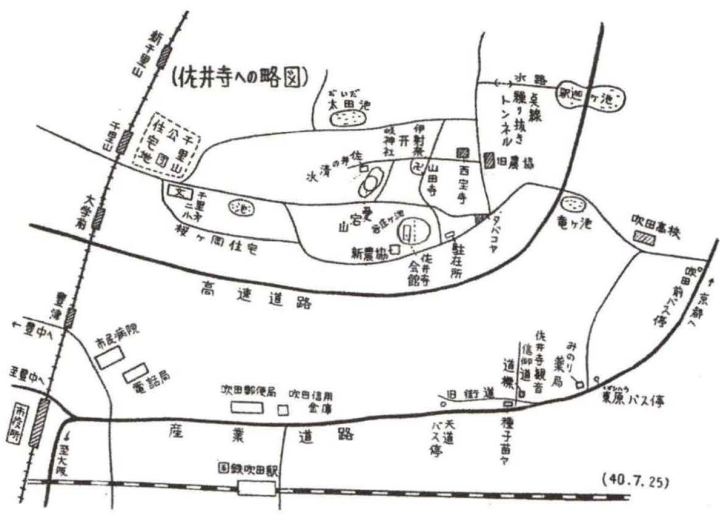
著者 藤井久義

発行者 吹田市佐井寺町自治会

藤井久義氏略歴

明治27年6月24日、大阪市西区北堀江御池通りにて生まれる。同36年西区九条北通りへ移る。  
 高等小学校中退後、貴金属品製作の徒弟に従事する。徴兵検査不合格により、東京へ出、二年間紹介を受けて二ヶ所へ就業、帰阪直後独立開業する。  
 第一次世界大戦後、ドイツの降伏後、パニック時代の余波をうけて、約20年間苦闘昭和17年造幣局勲章課へ奉職。同20年に再度の戦災に遭い、6月、吹田市佐井寺へ移り住む。昭和24年9月定年退職する。  
 その後(ヘクリオの会)「白鳥会」等に所属、当佐井寺にて短歌グループを結成するなどして今日に至る。  
 現住所 吹田市佐井寺町370 中 守国方 (昭40.10.5)

藤井久義氏作成の佐井寺地図(昭和40年頃)



なお、没年は晩年接触のあった方々のご子孫や吹田市役所、吹田市立博物館に問い合わせても判りませんでした、ご存じの方がいらっしゃればご連絡下さい。

(編集部)

目次

山田寺内「下馬」門碑(石碑)について/地蔵塚へ行く/おかうずる池/佐井の清水について/向い坂峠のお地蔵様/山田寺観音様の地蔵盆会/百七十体のお地蔵様/徴発を免れた釣り鐘/伊射奈岐神社殿前の「石標」と「菅広房」/伊射奈岐神社のコマ狗について/佐井寺より釈迦ヶ池への水路について/釈迦ヶ池の後日譚(一)「雁と鴨」と「窠跡」について/信仰道と「おかめ茶屋」/信仰道と狐坂/大阪市の水源地と佐井寺/安寿山に土器を拾う/寺下の八右エ門/山田の荘と寛応寺について/縄ない/糞尿(こえ) 汲取り物語/「銀板の墓誌銘」出土品の発見者大和・榊原氏宅訪問記(和仁儀一氏口述 本誌第十号「サイとワニ」に所収済)

「民謡集」表たたきのうた/田植えのうた/草取りのうた/水掻きのうた/白ひきのうた/糸つむぎのうた/子守うた

(続く)

最新の佐井寺地図(平成23年吹田市広報誌より)

